

■深山の父娘 (六卷)

原作及脚色者 帝キネ小阪映畫  
 指揮者 佃 血秋氏  
 監督者 中川 葉朗氏  
 廣瀬 五郎氏  
 撮影者 大森 勝氏

— 主要役割 —

深山の娘 潮 みどり嬢  
 老いたる父 嵐 瑠璃氏  
 麗の若人 片岡 仁引氏  
 幻想に現れる武士の妻 衣笠 みどり嬢  
 同 乳母 隅田 ます江嬢  
 同 若き武士 片岡 仁引氏

略筋。人里離れた深山の奥に老いたる父と美しい若い娘とが住んで居た。彼は美しい妻と不自由な立派な武士であつた。彼は美しい妻と不自由な義を捨て居た。それを知つた彼が、今や夫と愛兒を捨て出奔しやうとして居る妻と若侍とに迫つた時、彼の憤怒の刃は過つて妻を斃した。其後は人生の淺ましさを呪ひ妻の残した嬰兒を抱き此の深山に入つたのである。十数年は夢を過ぎ娘は美しく成長した。二人だけの世の中を樂しむ老父はその奪はれん事を恐れ娘に一切の世を知らさなかつた。併しいつが誰かの村の若人を見知つた娘の心には漸く戀心がめざめめ斯くて人の世を知つた彼女の心は次第に老父の傍から離れ若者の許へ走つた。父はそれを悲しむ若人から娘を奪ひ返す爲に若人の命までも奪つた。それを知つた娘は悲しみの餘り若人を慕ひ自殺して終つた。老いたる父の頼み空しく淋しい餘生が幾年か彼に残された……

嘗て歸山正氏が純映畫劇として發表したかの「深山の乙女」を想ひ出させる様な譯りさ氣分を持つ映畫である。佃血秋氏の商賣氣放れた脚色振りも益々所謂純映畫劇風味を出して居る。幻想と現實の扱ひ方に多少不手際な所もあるが總體に詩情豊かなものがある。廣瀬五郎氏の監督も大いに新人振りを發揮して居る。娘の夢のボカシや最後の父の幻想等にチャールズ・レイの「我が戀せし乙女」の手法が利用されて居た等は目新しい。潮みどり嬢の乙女はこれも柄も扮装も往年「深山の乙女」に於ける花柳はるみに酷似して居るが演技は階段の相違で實によく動いて居る。鏡を見て驚く邊り、戀を漸く知る頃の演技など適役といへる巧みに見せる加のお得意の水泳で肉體美をフンダンに見せるので觀者はすっかり感心して終ふ。嬢の眞價の充分發揮された映畫といへる。嵐瑠璃氏の父は嬢の助演といふ型で取り立て、いふ所もない。ロケイションは失敗で深山の感じなど皆無である。これは往年の「深山の乙女」の優れた背景が無性に懐かされた。然し斯うした興行價値を第二とし藝術的立場に立脚した作品の完成に努力した帝キネの意氣は多々すべきである。(六月廿六日、神戸一葉館、大阪高千代座)

— 山本 綠葉 —

